

事業報告

『HIV/AIDSチームの取組』

—MSW・薬剤師の関わりを中心に—

【薬剤師の関わり】

独立行政法人国立病院機構

福山医療センター/広島県東部地区エイズ治療センター（ACCES）

薬剤師 安岡 悠典

利益相反 開示

令和6年度第2回中国・四国ブロックエイズ治療拠点病院等連絡協議会

事業報告

『HIV/AIDSチームの取組』

—MSW・薬剤師の関わりを中心に—

【薬剤師の関わり】

発表者：安岡 悠典

発表に関連し、
開示すべき利益相反関係にある企業などはありません

薬剤部の概要

● 薬剤師：22名

● HIV感染症専門薬剤師：1名

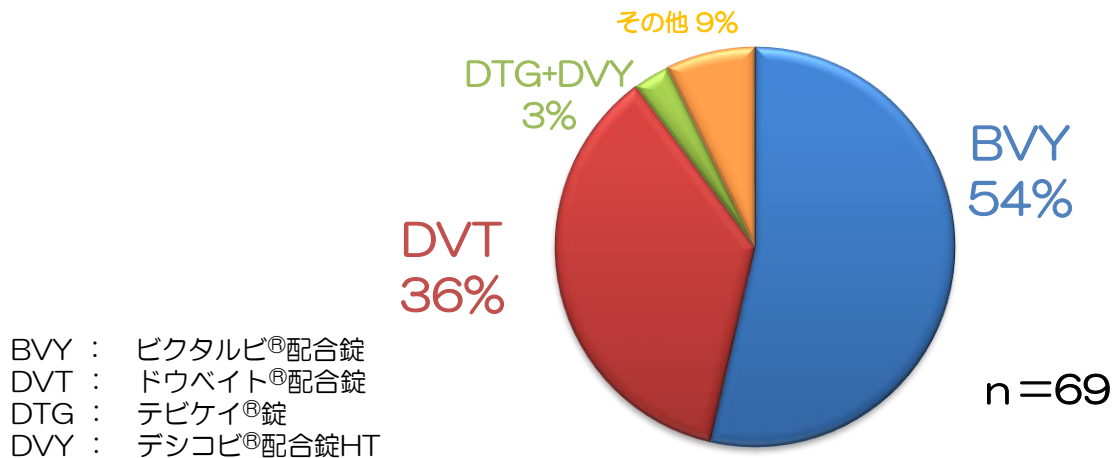
● HIV感染症薬物療法認定薬剤師：3名



HIV感染症患者の概要（2024.8）

- HIV感染症患者 69名（中央値：50歳）（27-79歳）
- 外国人患者 4名
- 男女比 男性64名 女性5名
- 抗HIV薬の院外処方箋発行率 88%（61/69名）

抗HIV薬のレジメ割合（組み合わせ：計7種類）



本日の発表内容

1. HIV薬剤師外来開始（2021.5～）
2. HIV薬剤師外来の運用変更（2023.9～）
3. 運用変更後の結果
4. まとめ・考察

本日の発表内容

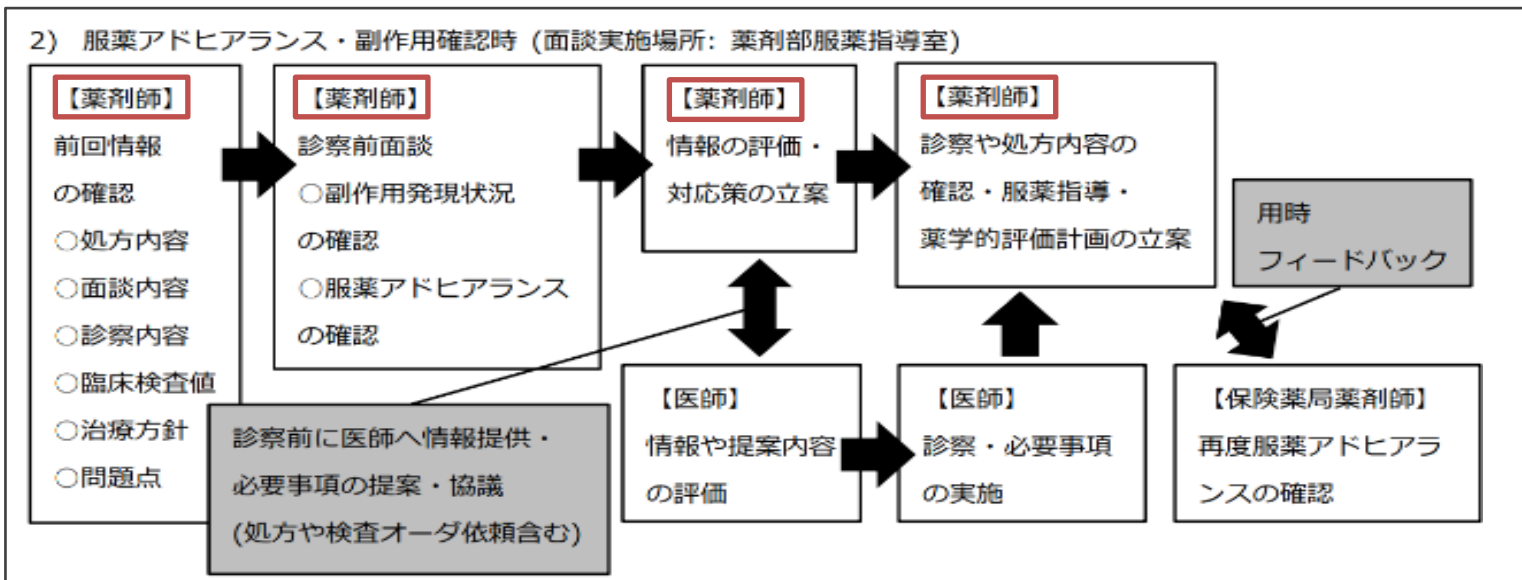
1. HIV薬剤師外来開始（2021.5～）
2. HIV薬剤師外来の運用変更（2023.9～）
3. 運用変更後の結果
4. まとめ・考察

薬剤師外来開始前の問題点

- ▶ 初回面談、抗HIV薬の開始・変更時、面談依頼時のみ対応。
- ▶ 上記以外の院外処方服薬指導は、保険薬局に一任。
- ▶ 当院通院中のHIV患者の状況を把握できていない現状。

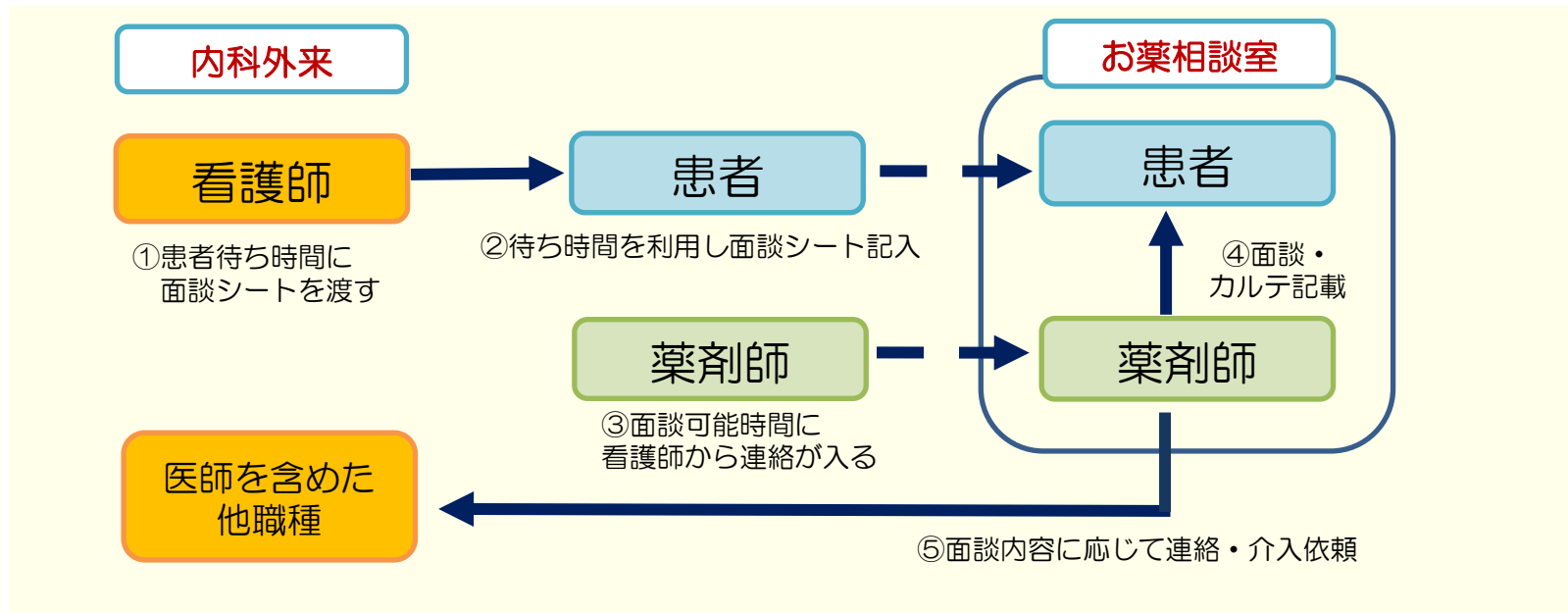
外来患者への対応が不十分

外来HIV感染者への薬剤師業務の進め方と 具体的実践事例Ver.1.0（日本病院薬剤師会）

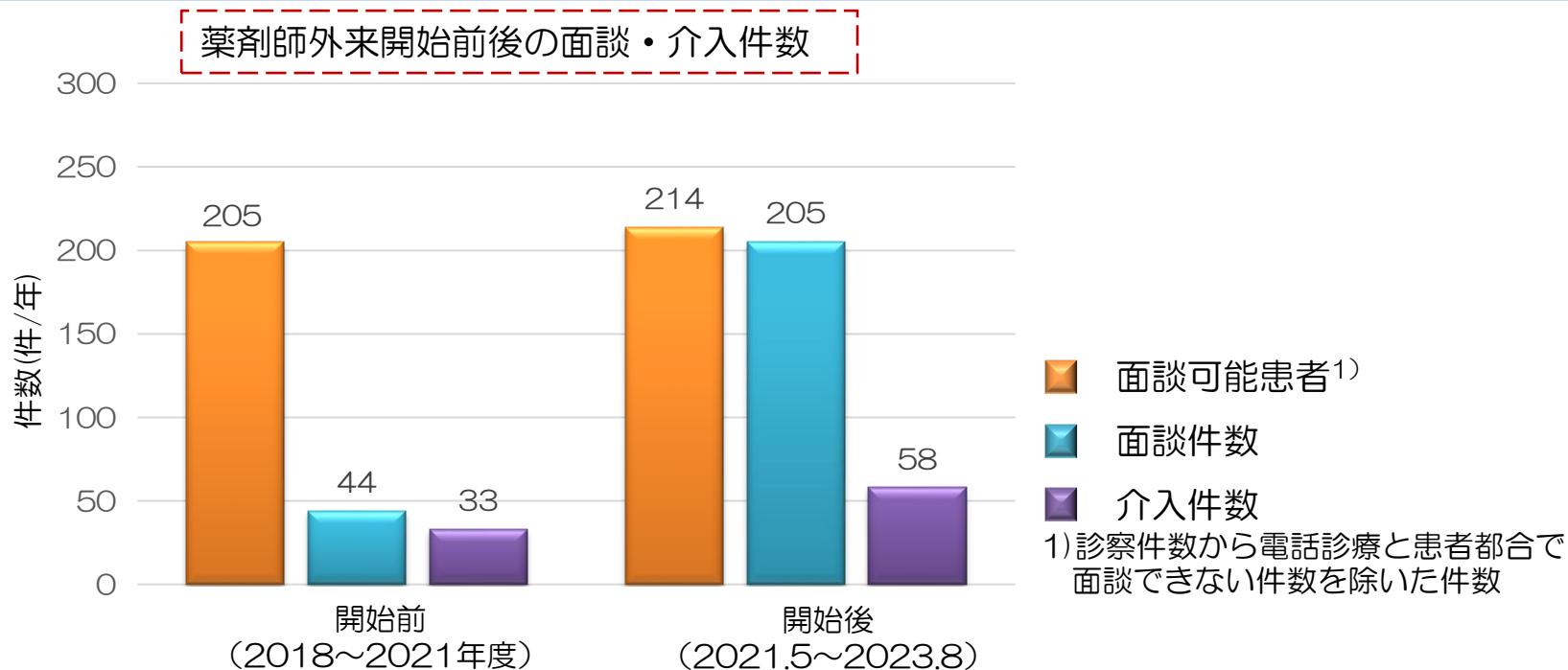


HIV薬剤師外来開始（2021.5～）

- 2021年5月から、全HIV感染症患者を把握し、介入する目的でHIV薬剤師外来を開始。
- 全患者と面談（患者都合や電話診療を除く）
- HIV担当薬剤師は、病棟業務と兼務で対応（毎週水曜日）
 - 主担当とヘルプの2名体制で対応する



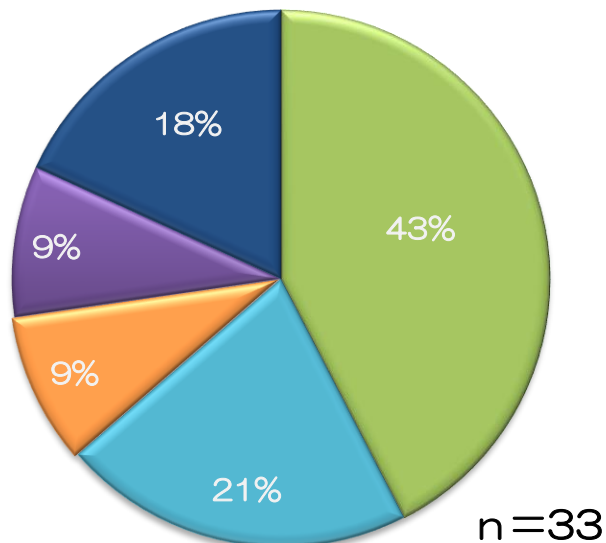
結果①（面談・介入件数）



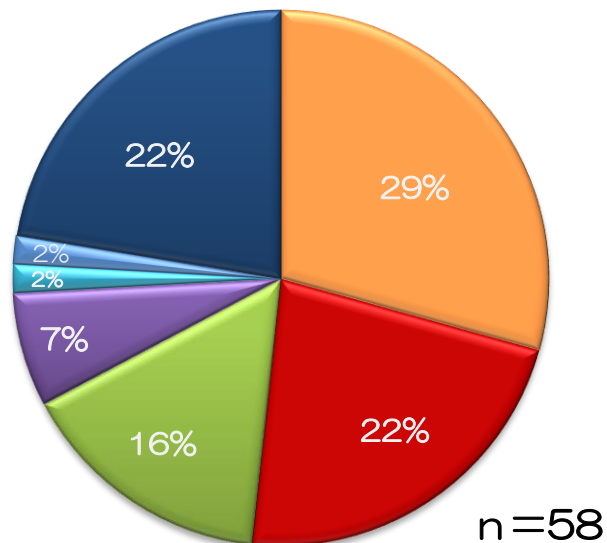
➤ 薬剤師外来開始前の面談率が21%であったが、薬剤師外来開始後は面談可能患者の内、96%に対して面談ができ、面談患者が増加したことによって、薬剤師の介入件数の増加につながった。

結果②（介入内容）

薬剤師外来開始前の年平均
(2018~2021年度)



薬剤師外来開始後の年平均
(2023.9~2024.8)



- 相互作用の注意喚起
- 処方薬の提案
- レジメ開始・変更
- 初回面談
- 院外処方への移行
- 他職種への介入依頼
- その他

薬剤師外来開始前はレジメ開始・変更に対する介入が多かったが、薬剤師外来開始後では相互作用の介入が増加した。

本日の発表内容

1. HIV薬剤師外来開始（2021.5～）
2. HIV薬剤師外来の運用変更（2023.9～）
3. 運用変更後の結果
4. まとめ・考察

薬剤師外来開始後の課題

- 担当薬剤師は病棟業務と兼務しており、全HIV感染症患者と面談を実施するため、日常業務時間を圧迫する。
- 体調変化や副作用もなく、薬剤やサプリメント等の変更のない患者に対しても、毎回面談を行っている。



2023年9月から必要な患者のみ面談を行うこととした。

薬剤師外来の運用変更（2023.9～）

2023.8まで

全患者と面談（患者都合や電話診療を除く）

2023.9から
（運用変更）

面談が必要な患者を事前にリストアップする方法へ

リストアップ条件

- ① 初回面談時
- ② ART開始・変更時
- ③ ART開始・変更した次の受診時
- ④ 患者・他職種からの面談依頼時
- ⑤ 院外薬局からの介入依頼時
- ⑥ 院内処方患者
- ⑦ カルテなどから薬剤師の介入が必要と判断した場合

（例）

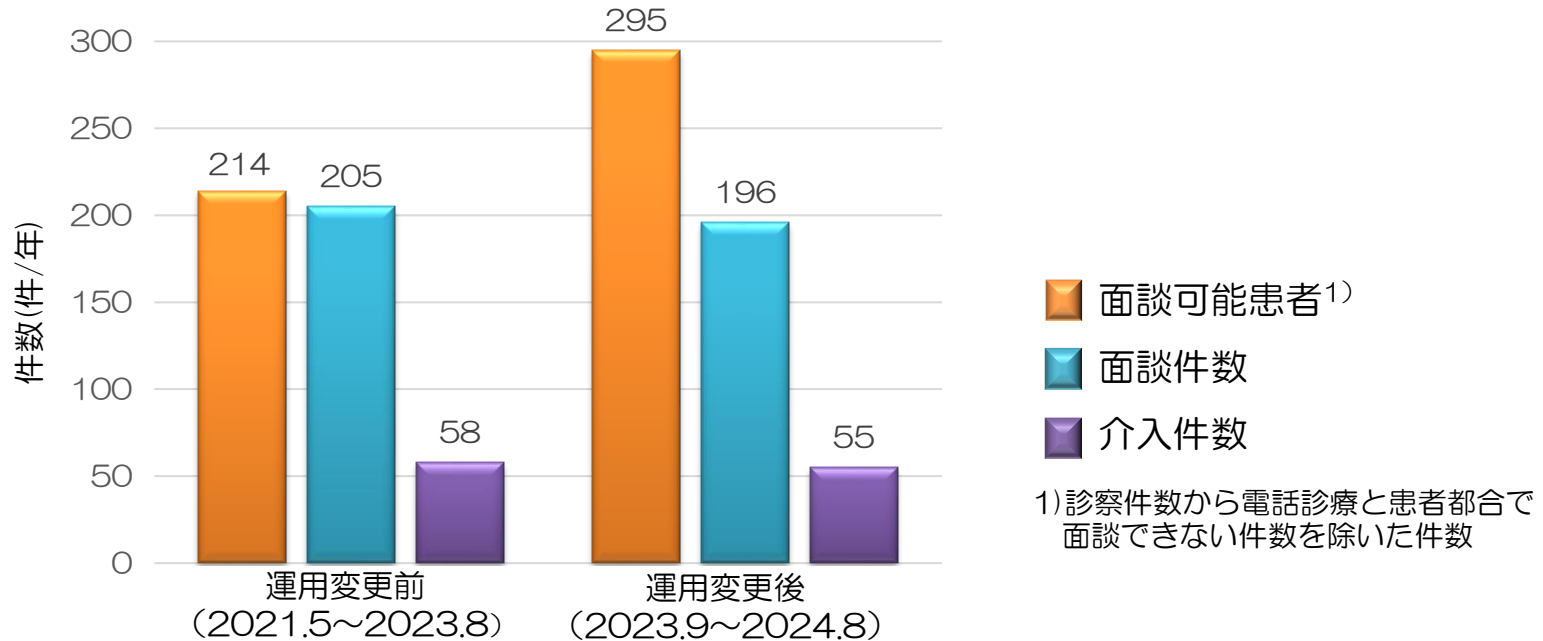
Blipがある（一過性で低いレベルのウイルス血症）
服薬アドヒアランス不良
薬物相互作用が考えられる
明らかな副作用や検査値異常の発現がある等

本日の発表内容

1. HIV薬剤師外来開始（2021.5～）
2. HIV薬剤師外来の運用変更（2023.9～）
- 3. 運用変更後の結果**
4. まとめ・考察

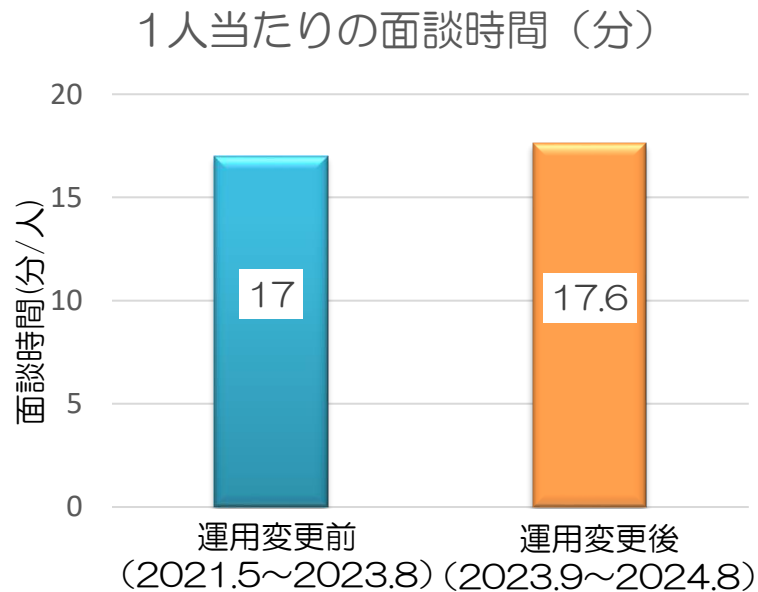
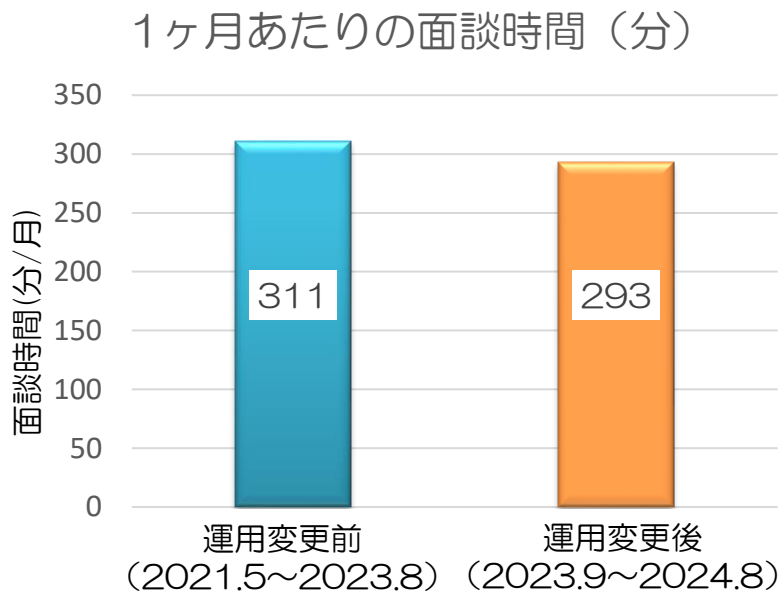
結果③（面談・介入件数）

薬剤師外来運用変更前後の面談・介入件数



介入件数は運用変更前後で維持できている。

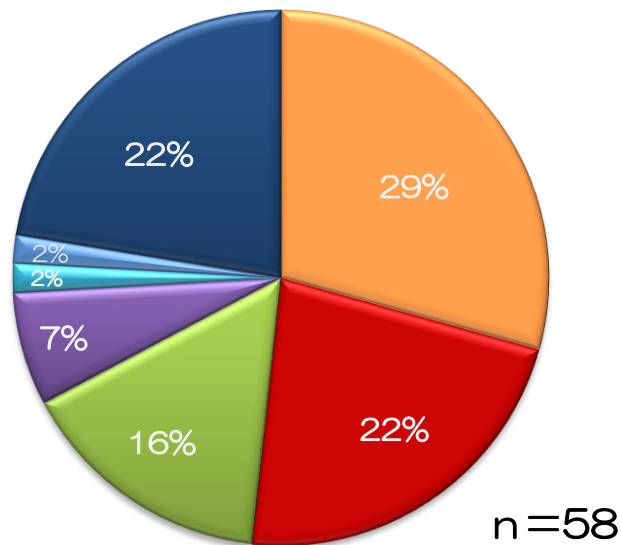
結果④（面談時間）



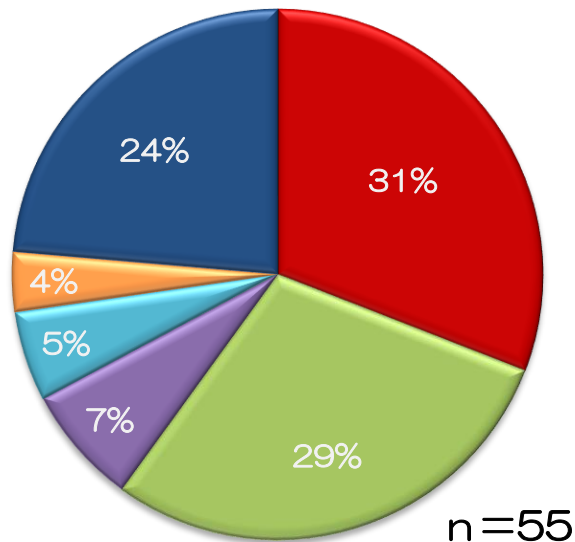
- 薬剤師外来運用変更後では面談の必要な患者を抽出したことで、1ヶ月あたりの面談時間は減少した。
- 薬剤師外来運用変更後では1人あたりの面談時間に大きな変化はなかった。

結果⑤（介入内容）

運用変更前の年平均
(2021.5~2023.8)



運用変更後の年平均
(2023.9~2024.8)



- 相互作用の注意喚起
- 処方薬の提案
- レジメ開始・変更
- 初回面談
- 院外処方への移行
- 他職種への介入依頼
- その他


- 薬剤師外来運用変更前の介入内容として、相互作用の注意喚起が最も多かった。
- 運用変更後は相互作用の介入は減少し、処方薬の提案が最も多かった。

本日の発表内容

1. HIV薬剤師外来開始（2021.5～）
2. HIV薬剤師外来の運用変更（2023.9～）
3. 運用変更後の結果
4. **まとめ・考察**

まとめ・考察

- ▶ 運用変更後、薬剤師が事前に面談の必要な患者を抽出したことで、1ヶ月あたりの面談時間は減少した。
- ▶ 運用変更後では相互作用の介入件数が減少し、薬剤提案についての介入数が増加した。
- ▶ 要因として、薬剤師外来開始時から薬剤や、サプリメント類の相互作用について継続して注意喚起してきた結果、患者がセルフマネジメントできるようになった事が考えられる。一方で、状態が安定しており、薬剤師が抽出の段階で除外した患者の中に相互作用の注意喚起が必要な患者がいる可能性も考えられる。



現在は面談していない患者でも1年毎を目安に薬剤師外来を実施し、面談を行っている。